

日常的解離にあたる空想と攻撃性の関連

岡田 太陽 神戸学院大学心理学研究科 竹田 剛 神戸学院大学心理学部

The relationship between fantasy as a form of everyday dissociation and aggression

Taiyo Okada (*Graduate School of Psychology, Kobe Gakuin University*)

Tsuyoshi Takeda (*Department of Psychology, Kobe Gakuin University*)

本研究では空想と攻撃性との関連の検討を行った。大学生 178 名(男性 74 名, 女性 103 名, その他 1 名)を対象に BAQ 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙と空想内容についての自由記述を含めた質問紙を用いた質問紙調査を行った。各空想内容と性別を独立変数, 各攻撃性と全攻撃性を従属変数として二要因分散分析を行った結果, 空想の有無・空想内の自死の有無・他死の有無において主効果が見られた。空想の有無では短気性・敵意性・身体的攻撃性・全攻撃性の 4 つ, 空想内の自死の有無では短気性・敵意性・全攻撃性の 3 つ, 空想内の他死の有無では敵意性の 1 つで主効果が見られた。そのすべての結果から, 空想は攻撃性と関連のある日常的解離であり, 行動化する前の攻撃性が高いほど, 自身が被害を受ける空想を行うことが示された。これは現実世界における欲求不満, すなわちうまくいかないという被害が, 空想内においても自身が被害を受けるという内容として表れているのだと考えられる。

Key words: everyday dissociation, fantasy, aggression

キーワード: 日常的解離, 空想, 攻撃性

Kobe Gakuin University Journal of Psychology
2025, Vol.7, No.2, pp.91-99

問題と目的

解離とは, DSM-5 では解離症群とされ「意識, 記憶, 同一性, 情動, 知覚, 身体表象, 運動制御, 行動の正常な統合における破綻 (disruption) および/または不連続 (discontinuity)」という特徴を持つと定義されており, この解離体験のしやすさは解離傾向と呼ばれている (吉住, 2010)。しかし, この解離は健常者においても空想などの比較的軽度で一時的な解離体験は生じるとされている (田辺, 2002)。こういった健常者が日常的に経験し得る解離は日常的解離や非病的解離, 正常解離とされ, 「うわの空・空想」「没頭・没入」「自動的行動」「同時行動」「出来事の詳細健忘」「近距離への遁走」「自己の客体化」「感覚の鈍化」の 8 つに分類できるとされる (舩田, 2008)。

このような, いわば日常的解離は葛藤の解消や感情のカタルシスなどの感情制御に関する適応的機能があるとされ (Putnam, 1993), 同時に, 大学生に対する質問紙を使用した研究によると未成熟な防衛機

制から構成される「極端思考・他者攻撃」と中程度の正の相関も持つことが示されている (吉住・村瀬, 2008)。また, 男性受刑者に対する質問紙を使用した研究によると解離経験は自傷行為といった攻撃性や衝動性の要素を持った不適応と関連するとされており (Matsumoto et al., 2005), これは女性の入院患者に対する研究においても同様の結果が見られている (Zlotnick et al., 1996)。

ここでいう攻撃性とは, 他の個体に対して危害を加えようと意図された行動を引き起こす内的過程の事である。攻撃性を測定する BAQ 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (安藤他, 1999) では攻撃性は, 怒り・敵意・攻撃行動によって構成される複合的な症候群という形で表出されると考えられており, 情動的側面である「短気」, 認知的側面である「敵意」, 攻撃性の行動的側面である「身体的攻撃」および「言語的攻撃」の 4 つの下位尺度が 5 件法で捉えられている。「短気」は怒りっぽさや怒りの抑制の弱さといった怒りの喚起されやすさ, 「敵意」は他者からの悪意や軽

視など猜疑心や不信感といった他者に対する否定的な信念・態度、「身体的攻撃」は暴力反応傾向や暴力への衝動、暴力への正当化といった身体的な攻撃反応、「言語的攻撃」は自己主張や議論好きといった言語的な攻撃反応である。

以上のことから解離傾向が高いと攻撃性が高いと言え、間接的に攻撃性を測るような活用が可能ではないだろうか。しかし、意識や記憶の統合が失われる病的な解離状態を観測することは、解離している本人及び第三者においても容易でないと考えられる。他、病的な解離はストレス障害や、愛着障害などその他の要因も考えられる。また、病的解離は実際に体験した者や体験する機会も少なく、結果的に活用する機会も少なくなるだろう。そこで、日常的解離であれば実際に体験した者や体験する機会も多く活用機会も多いと推測できる。また、Ludwig (1983) によると、解離は効率的な生活に必要なとされる行動の自動化のための本来、人に携わった適応的機制であり、その適応性が破綻した場合に病理化に発展するという。しかし、上記の日常的解離の 8 分類を例に上げると、自動行動や同時行動は適応的な解離と考えられるが、破綻しても攻撃性などに関連があるとは考えにくい。つまり解離の中には攻撃性に関連のある下位尺度と関連のない下位尺度があると考えられ、分類が可能ではないだろうか。しかし、日常的解離の 8 分類をはじめとした解離の下位尺度の詳細や攻撃性の下位尺度との関連の検討は少ない。そこで、日常的解離の下位尺度と攻撃性の検討を行うことでより正確な活用が期待できると考えられる。

日常的解離の 8 分類の内、舩田 (2008) の研究によると「出来事の詳細健忘」「自己の客体化」「感覚の鈍化」は外傷的状况によって生じるとされている。また、「没頭・没入」「自動的行動」「同時行動」「近距離への遁走」の下位尺度についても何等かの行動を目的またはきっかけとしていると考えられることから、上記の 7 つの下位尺度は何らかの外的要因が起因していると考えられる。他、体験の有無や状況以外の内容については得られる情報が少ない。対して、残る「うわの空・空想」については、退屈などの環境によって起因することは考えられるものの何かの刺激によって起因することは少ないと考えられ、中でも空想においては体験の有無や状況の他に、空想内容というより内面的な内容を調査することができるだろう。また、空想は意識明瞭でありながら、夢のように無意識的且つ自由な内容であり、より個人の内面が現れやすいと考えられる。

上記であげた先行研究のように、空想を扱う多くの研究で空想は「うわの空」といった物と並んで扱われているため「何かを他の事を考えている」といった意味合いで扱われていると考えられる。しかし、そうすると予定などの何らかの状況や行動、目的がある考えも含まれるため、自由な内容という要素が

薄くなってしまう。そのため本研究では考える内容によって分類し、その日の買い物の予定などの現実的に起こる又は起こり得る内容の思考を「想像」、魔法を使用するなどの現実には起こらない又は起こりにくい内容の思考のうち、現実には起こらないと自覚できていない思考を「妄想」、現実には起こらないと自覚した思考を「空想」と定義し、空想のみを取り扱う。

以上を踏まえ、本研究では上記の 8 分類における「うわの空・空想」、特に空想と攻撃性との関連を BAQ 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙と空想内容についての自由記述を含めた質問紙を用いて検討をおこなう。

その結果、日常的解離の内の空想において他者を傷つけるなどの攻撃的な傾向がある場合に攻撃性が高いといった正の相関結果が出れば、空想は攻撃性に関連のある下位尺度であると言えるだろう。一方で Lynn & Rhue (1988) によると空想は孤独や苦痛、怒りに対して適応的あるいは補償的に機能する可能性があるとされており、空想が攻撃性に関連があるものの適応的に働いている場合は、空想内において他者を傷つけるなどの攻撃的な傾向があると同時に、怒りの情緒的側面の「短気」尺度と怒りの認知的側面の「敵意」も高いものの、実際の攻撃反応である「身体的攻撃」「言語的攻撃」の 2 つの尺度は低くなると考えられる。

方 法

調査時期

本研究における調査は 2023 年 7 月 20 日～7 月 23 日と同年 7 月 25 日に実施した。

調査対象者

本研究における調査対象者は、私立大学に通う大学生 178 名（男性 74 名、女性 103 名、その他 1 名）であり、平均年齢は 18.9 歳 ($SD=1.02$) であった。

質問紙の構成

本調査における質問紙はフェイスシート、攻撃性に関する質問項目、最近の空想に関する質問項目から構成されている。

フェイスシートでは、調査対象者の調査参加の同意の有無、性別、年齢について回答を求めた。調査参加の同意の有無の項目では、調査の参加が自由な意思に基づいていることを明記した。

攻撃性に関する質問項目は BAQ 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙（安藤他, 1999）を用いた。BAQ 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙は Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) を日本版に作成された 24 項目の質問紙で

あり、攻撃性を情動的側面である「短気」、認知的側面である「敵意」、攻撃性の行動的側面である「身体的攻撃」および「言語的攻撃」の4つの下位尺度を5件法で捉えたものである。各尺度の構成は、短気尺度は「かっとなることを抑えるのが難しいときがある」等の5項目、敵意尺度は「陰で人から笑われているように思うことがある」等の7項目、身体的攻撃尺度は「どんな場合でも、暴力に正当な理由があるとは思えない」等の7項目、言語的攻撃尺度は「意見が対立したときは、議論しないと気がすまない」等の5項目、全24項目である。この質問紙の信頼性はクロンバックの α 係数をはじめとした複数の方法で認められており、妥当性についても因子の妥当性をはじめとした複数の方法で認められている。

最近の空想に関する質問項目は今回の調査で新たに作成した。日常解離についての尺度や空想についての質問紙はあるものの、解離や空想のグループ化、空想の目的や理由、影響について聞くものが散見され、空想内容について聞くものは無いため今回新たに作成した。質問内容は、空想の有無、空想を行う状況や程度、空想の詳細、夢の詳細、空想に対する意識、について聞くものに分かれている。また、空想について聞く際、上記の「現実には起こらないこと・起こりにくいことの想像」という空想の定義を示した。

(1) 空想の有無では過去や最近の空想の有無と攻撃性の関連を調べるために「空想経験の有無」「最近の空想の有無とその程度」について回答を求めた。

(2) 空想の状況や程度では空想の頻度や日常生活への影響度と攻撃性の関連を調べるために「最近の空想を行った状況」「空想による日常生活への影響の有無と詳細」「空想による日常生活への影響の程度」「最近の空想の反芻の有無と一貫性」「最近の空想の反芻期間」について回答について回答を求めた。

(3) 空想の詳細では、空想の非現実性や空想内における自傷・他傷度と攻撃性の関連を調べるために「最近の空想の具体的な詳細」「最近の空想の題材の有無と題材内容」「最近の空想の非現実部分」「最近の空想の非現実度」「最近の空想における自傷度」「最近の空想における他傷度」「最近の空想における他生物傷度」「最近の空想における他物傷度」「最近の空想における自身の死の有無」「最近の空想における自分以外の人の死ぬ数」「最近の空想における人以外の生物の死ぬ数」「最近の空想における生物以外の物の壊れる数」「最近の空想における自身の救いの有無」「最近の空想における自分以外の人を救う数」「最近の空想における人以外の生物を救う数」「最近の空想における生物以外の物を救う数」について回答を求めた。

(4) 空想の詳細についての回答を求める途中、空想内における自傷度・他傷度についての回答を促すための練習として、その直前に回答を求めた夢の詳細

細では「過去の夢における自傷度」「過去の夢における他傷度」「過去の夢における他生物傷度」「過去の夢における他物傷度」について回答を求めた。

(5) 空想に対する意識では、攻撃性との関連を調べるために「空想を行う理由」「空想を行わない理由」について回答を求めた。

「空想を行わない理由」は、上記の「空想経験の有無」において、ないと回答した場合に、その後の質問項目を全て省略し、自由記述で回答を求めた。

手続き

本研究における調査では、調査の概要、上記のフェイスシート、攻撃性に関する質問項目、最近の空想に関する質問項目から構成された質問紙を Qualtrics で作成した。質問紙の配布は大学教員2名に依頼し、それぞれの教員が担当している講義において配布を行った。配布時、調査参加は自由な意思に強制されるものではないこと、名前などの個人を特定できるものも一切収集せず、回答内容のみを取り扱うこと、回答は調査用のサーバー上で暗号化・保存され、研究終了後にすべてのデータを削除すること、質問紙の主な構成、調査実施者について説明し、同意する者のみ回答を続けるよう促した。

結果

空想経験の有無と攻撃性の関連

まず、空想経験の有無における各攻撃性および全攻撃性の平均値と標準偏差を男性、女性、全体で示したものを、それぞれ表1～3に示す。

表1

男性の空想経験の有無における各攻撃性および全攻撃性の平均と標準偏差

下位尺度	空想経験あり(n=57)		空想経験なし(n=17)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
短気	14.3	4.12	10.5	3.97
敵意	18.6	4.78	16.5	4.60
身体的攻撃性	17.9	5.08	14.5	5.17
言語的攻撃性	16.1	3.90	15.7	4.66
全攻撃性	67.0	10.99	57.1	13.44

表2

女性の空想経験の有無における各攻撃性および全攻撃性の平均と標準偏差

下位尺度	空想経験あり(n=81)		空想経験なし(n=22)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
短気	13.3	4.59	11.6	3.02
敵意	18.4	5.28	14.5	4.09
身体的攻撃性	13.5	4.83	11.3	4.31
言語的攻撃性	14.3	3.63	14.3	3.86
全攻撃性	59.4	12.39	51.6	7.48

表 3

全体の空想経験の有無における各攻撃性および
全攻撃性の平均と標準偏差

下位尺度	空想経験あり($n=138$)		空想経験なし($n=39$)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
短気	13.7	4.42	11.1	3.46
敵意	18.5	5.06	15.3	4.38
身体的攻撃性	15.3	5.39	12.7	4.91
言語的攻撃性	15.0	3.84	14.9	4.23
全攻撃性	62.5	12.38	54.0	10.71

次に空想経験の有無と性別によって各攻撃性と全攻撃性の得点に差があるかを検討するために、行った二要因分散分析の結果をまとめたものを表 4 に示す。

その結果、空想経験の有無による主効果が見られたのは、短気性 ($F(1, 173)=12.58, p<.001$)、敵意性 ($F(1, 173)=11.37, p<.001$)、身体的攻撃性 ($F(1, 173)=9.88, p<.01$)、全攻撃性 ($F(1, 173)=17.33, p<.001$) であった。性別による主効果が見られたのは、身体的攻撃性 ($F(1, 173)=18.28, p<.001$)、言語的攻撃性 ($F(1, 173)=5.49, p<.01$)、全攻撃性 ($F(1, 173)=9.61, p<.01$) であった。また、空想経験の有無と性別による各攻

撃性および全攻撃性への交互作用は見られなかった。以上の結果から、空想を行ったことがない人よりも行ったことがある人の方が短気性、敵意性、身体的攻撃性、全攻撃性が高く、女性よりも男性の方が身体的攻撃性、言語的攻撃性、全攻撃性が高いことが示された。

表 4

各攻撃性および全攻撃性についての空想経験の有無と
男女差による二要因分散分析の結果

下位尺度	空想の有無		性別		交互作用	
	F 値	有意差	F 値	有意差	F 値	有意差
短気	12.58***	有>無	0.00	n.s.	1.97	n.s.
敵意	11.37***	有>無	1.54	n.s.	0.99	n.s.
身体的攻撃性	9.88**	有>無	18.28***	男>女	0.49	n.s.
言語的攻撃性	0.09	n.s.	5.49*	男>女	0.10	n.s.
全攻撃性	17.33***	有>無	9.61**	男>女	0.24	n.s.

注)*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

空想内の自傷度と攻撃性の関連

まず、空想内の自傷度における各攻撃性および全攻撃性の平均と標準偏差を男性、女性、全体で示したものを、それぞれ表 5～7 に示す。

表 5

男性の空想内の自傷度における各攻撃性および全攻撃性の平均と標準偏差

下位尺度	傷付かない($n=23$)		身体が傷付く($n=11$)		心が傷付く($n=10$)		心身共に傷つく($n=10$)		自分は登場しない($n=3$)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
短気	13.8	4.90	13.9	3.08	14.8	4.13	15.2	3.46	14.7	5.03
敵意	17.8	4.69	16.7	4.45	21.7	2.91	19.5	5.42	18.3	7.02
身体的攻撃性	17.0	4.55	19.5	4.55	18.2	5.49	19.1	6.74	14.7	2.08
言語的攻撃性	16.3	3.74	16.8	3.34	15.3	3.34	17.0	4.97	12.7	5.13
全攻撃性	64.9	9.19	66.9	11.00	70.0	12.85	70.8	12.24	60.3	14.01

表 6

女性の空想内の自傷度における各攻撃性および全攻撃性の平均と標準偏差

下位尺度	傷付かない($n=51$)		身体が傷付く($n=4$)		心が傷付く($n=17$)		心身共に傷つく($n=7$)		自分は登場しない($n=2$)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
短気	12.7	4.75	14.8	2.75	14.3	3.85	15.3	5.12	9.5	6.36
敵意	17.3	5.59	18.8	3.40	19.7	3.43	23.1	5.40	18.5	4.95
身体的攻撃性	17.0	4.55	19.5	4.55	18.2	5.49	19.1	6.74	14.7	2.08
言語的攻撃性	16.3	3.74	16.8	3.34	15.3	3.34	17.0	4.97	12.7	5.13
全攻撃性	57.3	12.52	61.3	6.75	61.7	7.88	69.3	18.39	53.5	14.85

表 7

全体の空想内の自傷度における各攻撃性および全攻撃性の平均と標準偏差

下位尺度	傷付かない($n=74$)		身体が傷付く($n=15$)		心が傷付く($n=27$)		心身共に傷つく($n=17$)		自分は登場しない($n=5$)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
短気	13.0	4.79	14.1	2.92	14.5	3.89	15.2	4.07	12.6	5.55
敵意	17.5	5.30	17.3	4.18	20.4	3.34	21.0	5.56	18.4	5.55
身体的攻撃性	14.2	5.09	17.9	4.65	15.7	4.80	17.5	7.38	13.4	2.30
言語的攻撃性	15.0	3.77	16.1	3.33	14.2	3.35	16.5	4.89	13.2	3.96
全攻撃性	59.7	12.05	65.4	10.15	64.7	10.60	70.2	14.55	57.6	12.93

次に空想内の自傷度と性別によって各攻撃性と全攻撃性の得点に差があるかを検討するために、行った二要因分散分析の結果をまとめたものを表8に示す。

その結果、空想内の自傷度による攻撃性への主効果が見られたのは、敵意性 ($F(4, 128)=3.14, p<.05$)、全攻撃性 ($F(4, 128)=2.59, p<.05$) であった。しかし、Tukey HDS 法を用いた多重比較によるとどちらの攻撃性においても、どの自傷度の間にも有意差は見られなかった。性別による攻撃性への主効果が見られたのは、身体的攻撃性 ($F(1, 128)=10.58, p<.01$)、全攻撃性 ($F(1, 128)=3.99, p<.05$) であった。また、空想内の自傷度と性別による各攻撃性および全攻撃性への交互作用は見られなかった。以上の結果から、自身が傷付かない空想をする人よりも、傷付く空想をするの方が敵意性、全攻撃性が高く、女性よりも男性の方が身体的攻撃性、全攻撃性が高いことが示された。

表 8

各攻撃性および全攻撃性についての空想内の自傷度と男女差による二要因分散分析の結果

下位尺度	自傷度		性別		交互作用	
	F値	有意差	F値	有意差	F値	有意差
短気	1.09	n.s.	1.09	n.s.	0.47	n.s.
敵意	3.14*	高>低	0.27	n.s.	1.01	n.s.
身体的攻撃性	1.15	n.s.	10.58**	男>女	0.09	n.s.
言語的攻撃性	1.00	n.s.	1.81	n.s.	0.28	n.s.
全攻撃性	2.59*	高>低	3.99*	男>女	0.26	n.s.

注)*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

注)____は分散分析では有意差は見られたものの、多重比較では有意差が見られなかったもの。

空想内の他傷度と攻撃性の関連

まず、空想内の他傷度における各攻撃性および全攻撃性の平均と標準偏差を男性、女性、全体で示したものを、それぞれ表9～11に示す。

次に空想内の他傷度と性別によって各攻撃性と全攻撃性の得点に差があるかを検討するために、行っ

表 9

男性の空想内の他傷度における各攻撃性および全攻撃性の平均と標準偏差

下位尺度	傷付かない (n=28)		身体が傷付く (n=12)		心が傷付く (n=5)		心身共に傷つく (n=12)		自分は登場しない (n=0)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
短気	13.6	4.41	14.3	3.26	15.2	4.27	15.6	4.25		
敵意	18.9	4.75	16.2	4.06	17.2	2.39	21.0	5.33		
身体的攻撃性	17.3	4.80	18.9	4.83	19.4	7.27	17.7	5.40		
言語的攻撃性	16.2	3.82	16.9	3.20	16.0	4.06	15.3	4.89		
全攻撃性	66.0	10.19	66.3	10.97	67.8	15.50	69.6	11.91		

表 10

女性の空想内の他傷度における各攻撃性および全攻撃性の平均と標準偏差

下位尺度	傷付かない (n=58)		身体が傷付く (n=4)		心が傷付く (n=11)		心身共に傷つく (n=6)		自分は登場しない (n=2)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
短気	13.1	4.93	12.8	5.74	14.0	3.52	14.0	3.29	11.0	1.41
敵意	17.5	5.50	21.5	5.80	20.3	4.43	21.2	2.64	19.5	0.71
身体的攻撃性	13.5	5.14	14.3	2.87	13.8	3.71	12.7	5.20	10.0	5.66
言語的攻撃性	14.4	3.86	12.8	1.71	14.2	2.93	14.2	3.76	13.5	4.95
全攻撃性	58.6	13.64	61.3	14.89	62.3	5.90	62.0	8.15	54.0	9.90

表 11

全体の空想内の他傷度における各攻撃性および全攻撃性の平均と標準偏差

下位尺度	傷付かない (n=86)		身体が傷付く (n=16)		心が傷付く (n=16)		心身共に傷つく (n=18)		自分は登場しない (n=2)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
短気	13.3	4.75	13.9	3.86	14.4	3.67	15.1	3.93	11.0	1.41
敵意	18.0	5.28	17.5	4.95	19.3	4.09	21.1	4.52	19.5	0.71
身体的攻撃性	14.8	5.31	17.8	4.81	15.6	5.51	16.0	5.72	10.0	5.66
言語的攻撃性	15.0	3.91	15.9	3.40	14.8	3.30	14.9	4.47	13.5	4.95
全攻撃性	61.0	13.03	65.1	11.73	64.0	9.71	67.1	11.18	54.0	9.90

た二要因分散分析の結果をまとめたものを表 12 に示す。

その結果、空想内の他傷度による攻撃性への主効果はいずれの攻撃性においても見られなかった。性別による攻撃性への主効果が見られたのは、身体的攻撃性 ($F(1, 128)=10.58, p<.01$)、言語的攻撃性 ($F(1, 129)=5.51, p<.05$)、全攻撃性 ($F(1, 128)=3.99, p<.05$) であった。また、空想内の自傷度と性別による各攻撃性および全攻撃性への交互作用は見られなかった。以上の結果から、空想内における他者の傷付く程度によって攻撃性に差があるとは言えず、女性よりも男性の方が身体的攻撃性、全攻撃性が高いことが示された。

表 12

各攻撃性および全攻撃性についての空想内の他傷度と男女差による二要因分散分析の結果

下位尺度	他傷度		性別		交互作用	
	F値	有意差	F値	有意差	F値	有意差
短気	0.68	n.s.	2.17	n.s.	0.12	n.s.
敵意	1.13	n.s.	1.72	n.s.	2.09	n.s.
身体的攻撃性	0.93	n.s.	17.99***	男>女	0.17	n.s.
言語的攻撃性	0.19	n.s.	5.51*	男>女	0.41	n.s.
全攻撃性	0.67	n.s.	6.34*	男>女	0.05	n.s.

注)*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

空想内の自身の死の有無と攻撃性の関連

まず、空想内における自身の死の有無における各攻撃性および全攻撃性の平均値と標準偏差を男性、女性、全体で示したものを、それぞれ表 13～15 に示す。

表 13

男性の空想内の自身の死の有無における各攻撃性および全攻撃性の平均と標準偏差

下位尺度	自身の死あり($n=16$)		自身の死なし($n=41$)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
短気	14.9	4.41	14.1	4.04
敵意	20.8	4.43	17.8	4.68
身体的攻撃性	20.4	5.38	17.0	4.68
言語的攻撃性	17.2	4.52	15.7	3.61
全攻撃性	73.3	13.17	64.5	9.07

表 14

女性の空想内の自身の死の有無における各攻撃性および全攻撃性の平均と標準偏差

下位尺度	自身の死あり($n=19$)		自身の死なし($n=62$)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
短気	15.6	3.81	12.5	4.60
敵意	19.6	5.08	18.0	5.32
身体的攻撃性	13.6	5.50	13.4	4.66
言語的攻撃性	15.2	3.34	14.0	3.69
全攻撃性	64.1	13.16	57.9	11.89

表 15

全体の空想内の自身の死の有無における各攻撃性および全攻撃性の平均と標準偏差

下位尺度	自身の死あり($n=35$)		自身の死なし($n=103$)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
短気	15.3	4.05	13.2	4.43
敵意	20.2	4.76	17.9	5.05
身体的攻撃性	16.7	6.36	14.8	4.96
言語的攻撃性	16.1	3.99	14.7	3.74
全攻撃性	68.3	13.78	60.6	11.28

次に空想内の自身の死の有無と性別によって各攻撃性と全攻撃性の得点に差があるかを検討するために、行った二要因分散分析の結果をまとめたものを表 16 に示す。

その結果、空想内の自身の死の有無による攻撃性への主効果が見られたのは、短気性 ($F(1, 134)=5.11, p<.05$)、敵意性 ($F(1, 134)=5.59, p<.05$)、全攻撃性 ($F(1, 134)=10.78, p<.01$) であった。性別による攻撃性への主効果が見られたのは、身体的攻撃性 ($F(1, 134)=28.70, p<.001$)、言語的攻撃性 ($F(1, 134)=6.43, p<.05$)、全攻撃性 ($F(1, 134)=12.15, p<.001$) であった。また、空想内の自身の死の有無と性別による各攻撃性および全攻撃性への交互作用は見られなかった。以上の結果から、自身が死ぬ空想を行わない人よりも行う人の方が短気性、敵意性、全攻撃性が高く、女性よりも男性の方が身体的攻撃性、言語的攻撃性、全攻撃性が高いことが示された。

表 16

各攻撃性および全攻撃性についての空想内の自死の有無と男女差による二要因分散分析の結果

下位尺度	自身の死の有無		性別		交互作用	
	F値	有意差	F値	有意差	F値	有意差
短気	5.11*	有>無	0.24	n.s.	1.74	n.s.
敵意	5.59*	有>無	0.22	n.s.	0.53	n.s.
身体的攻撃性	3.61	n.s.	28.7***	男>女	2.77	n.s.
言語的攻撃性	3.34	n.s.	6.43*	男>女	0.02	n.s.
全攻撃性	10.78**	有>無	12.15***	男>女	0.34	n.s.

注)*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

空想内の他者の死の有無と攻撃性の関連

まず、空想内における他者の死の有無における各攻撃性および全攻撃性の平均値と標準偏差を男性、女性、全体で示したものを、それぞれ表 17～19 に示す。

表 17

男性の空想内の他者の死の有無における各攻撃性および全攻撃性の平均と標準偏差

下位尺度	他者の死あり($n=17$)		他者の死なし($n=40$)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
短気	13.8	4.10	14.5	4.17
敵意	20.9	4.43	17.7	4.64
身体的攻撃性	18.9	6.21	17.5	4.54
言語的攻撃性	16.6	4.99	16.0	3.39
全攻撃性	70.2	14.45	65.6	9.02

表 18

女性の空想内の他者の死の有無における各攻撃性および全攻撃性の平均と標準偏差

下位尺度	他者の死あり(<i>n</i> =16)		他者の死なし(<i>n</i> =65)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
短気	13.5	4.50	13.2	4.65
敵意	20.2	4.61	18.0	5.37
身体的攻撃性	12.6	4.26	13.7	4.97
言語的攻撃性	14.1	2.87	14.3	3.81
全攻撃性	60.4	10.56	59.1	12.86

表 19

全体の空想内の他者の死の有無における各攻撃性および全攻撃性の平均と標準偏差

下位尺度	他者の死あり(<i>n</i> =33)		他者の死なし(<i>n</i> =105)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
短気	13.7	4.19	13.7	4.50
敵意	20.6	4.46	17.8	5.08
身体的攻撃性	15.9	6.16	15.1	5.14
言語的攻撃性	15.4	4.23	14.9	3.72
全攻撃性	65.5	13.46	61.6	11.93

次に空想内の他者の死の有無と性別によって各攻撃性と全攻撃性の得点に差があるかを検討するために、行った二要因分散分析の結果をまとめたものを表 20 に示す。

その結果、空想内の他者の死の有無による攻撃性への主効果が見られたのは、敵意性 ($F(1, 134)=7.46, p<.01$) であった。性別による攻撃性への主効果が見られたのは、身体的攻撃性 ($F(1, 134)=25.78, p<.001$)、言語的攻撃性 ($F(1, 134)=7.36, p<.01$)、全攻撃性 ($F(1, 134)=11.63, p<.001$) であった。また、空想内の他者の死の有無と性別による各攻撃性および全攻撃性への交互作用は見られなかった。以上の結果から、他者が死ぬ空想を行わない人よりも行う人の方が敵意性が高く、女性よりも男性の方が身体的攻撃性、言語的攻撃性、全攻撃性が高いことが示された。

表 20

各攻撃性および全攻撃性についての空想内の他者の死の有無と男女差による二要因分散分析の結果

下位尺度	他者の死の有無		性別		交互作用	
	<i>F</i> 値	有意差	<i>F</i> 値	有意差	<i>F</i> 値	有意差
短気	0.14	<i>n.s.</i>	0.55	<i>n.s.</i>	0.31	<i>n.s.</i>
敵意	7.46**	有>無	0.04	<i>n.s.</i>	0.25	<i>n.s.</i>
身体的攻撃性	0.03	<i>n.s.</i>	25.78***	男>女	1.48	<i>n.s.</i>
言語的攻撃性	0.09	<i>n.s.</i>	7.36**	男>女	0.29	<i>n.s.</i>
全攻撃性	1.54	<i>n.s.</i>	11.63***	男>女	0.47	<i>n.s.</i>

注)*** $p<.001$, ** $p<.01$

考 察

本研究では空想と攻撃性との関連を検討することを目的として、BAQ 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙と空想内容についての自由記述を含めた質問紙を用いて大学生を対象に質問紙調査を行った。空想内

容と性別を独立変数、各攻撃性と全攻撃性を従属変数とした二要因分散分析を行い、主効果および交互作用の検定を行った。その結果をまとめたものを表 21・22 に示す。

表 21

各攻撃性および全攻撃性についての空想内容による各主効果の検定の有意差の一覧

下位尺度	空想経験の有無	空想内の自傷度	空想内の他傷度	空想内の自死の有無	空想内の他死の有無
短気性	有>無	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	有>無	<i>n.s.</i>
敵意性	有>無	高>低	<i>n.s.</i>	有>無	有>無
身体的攻撃性	有>無	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>
言語的攻撃性	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>
全攻撃性	有>無	高>低	<i>n.s.</i>	有>無	<i>n.s.</i>

注) ____ は分散分析では有意差は見られなかったものの、多重比較では有意差が見られなかったもの。

注)空想経験の有無、空想内の自死の有無、空想内の他死の有無については多重比較を行っていない。

表 22

各攻撃性および全攻撃性についての男女差による各主効果の検定の有意差の一覧

下位尺度	空想経験の有無	空想内の自傷度	空想内の他傷度	空想内の自死の有無	空想内の他死の有無
短気性	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>
敵意性	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>
身体的攻撃性	男>女	男>女	男>女	男>女	男>女
言語的攻撃性	男>女	<i>n.s.</i>	男>女	男>女	男>女
全攻撃性	男>女	男>女	男>女	男>女	男>女

空想経験の有無と攻撃性の関連

空想経験の有無においては短気性、敵意性、身体的攻撃性、全攻撃性と主効果が見られ、そのすべてが空想を行ったことがない人よりも行ったことがある人の方が高いという結果であった。つまり怒りの喚起されやすさ、他者に対する否定的な信念・態度、身体的な攻撃反応の高さと、空想の行いやすさには関連があるということである。これは日常解離にあたる空想が攻撃性という不適応と関連する解離であると言える結果であるだろう。空想が不適応と関連する解離である理由としては、目的でも挙げた通り、空想のその自由度が上げられる。空想は意識明瞭でありながら、夢のように無意識的且つ自由な内容であり、より個人の内面が現れやすいと考えられるが、自由な空間を体験するまたは体験しようとするということは現実世界において自由に動いていないということではないだろうか。つまり現実世界で社会的な観点から攻撃性を抑圧しているものの、それが解消できず自由な空想へ逃避を行っているという可能性が考えられる。

もう一つの可能性として空想経験の記憶の有無が考えられる。空想経験の有無を聞く質問で空想を行ったことがないと回答した人はいたものの、実際一度は「お金持ちになったら」などと考えたことがあるのではないだろうか。つまり忘れていた可能性が考えられる。言い換えると空想の有無が攻撃性と関連しているのではなく、空想を記憶しているかどうか、空想が攻撃性と関連しているのではないだろうか。空想は自由な空間という特性上、現実からの逃避やより

良い状況への願望として行われる可能性が高いだろう。その現実からの逃避やより良い状況への願望を記憶し続けているということは、空想に執着又は追いかけて続けているとも言えることができ、つまり現実の抑圧の解消に力が向いていないとも考えられ、結果的に現実の抑圧が消えず、結果的に攻撃性として表れている可能性が考えられる。そのため一時的に現実からの逃避や願望を行っても、すぐに抑圧の解消に力が向く人は空想が記憶されず、攻撃性も低くなる可能性が考えられる。

また、言語的攻撃性のみ関連が見られなかった理由として、言語的攻撃性は適応的、補償的な攻撃性という可能性が考えられる。例えば言語的攻撃性測る質問は「不愉快なことをされたら、不愉快だとはっきりというか」や「でしゃばる人をたしなめることができるか」などであるが、これは他の個体に対して危害を加えようと意図された行動ではなく、むしろ他の個体に傷つけられないように適切な距離を取る手段という側面が強い。この距離を取る手段という点では「挑発されたら殴りたくなるか」や「権利を守るためには暴力もやむを得ないと思うか」などの身体的攻撃性を測る質問にも言えることではあるが、現代社会では身体的攻撃性が問題とされており、言葉を用いた対話で距離を取る言語的攻撃性が望ましいとされていることは明らかである。もちろん言葉を用いた対話と言っても、言葉遣いや声の大きさ、トーンなどによっては対話ではなく、より攻撃的な暴言になることもあるが今回使用した攻撃性の質問紙ではそういった部分が聞かれていなかったため関連が見られなかったのだと考える。そのため「言葉遣いが悪くなるか」や「大声で威圧してしまうか」などの質問項目があれば言語的攻撃性も空想との関連が見られた可能性があるだろう。

空想内の自傷度・自身の死の有無と攻撃性の関連

空想内における自傷度においては敵意性、全攻撃性と主効果が見られ、その両方が空想を行ったことがない人よりも行ったことがある人の方が高いという結果であった。つまり他者に対する否定的な信念・態度が高い人は比較的に自身が傷つく空想を行いやすいということである。また、この結果は空想内における自身の死の有無においても似た結果が示されている。空想内における自身の死の有無においては短気性、敵意性、全攻撃性と主効果が見られ、そのすべてが空想内で自身が死なない人よりも死ぬ人の方が高いという結果であった。つまり、怒りの喚起されやすさ、他者に対する否定的な信念・態度が高い人は比較的に自身が死ぬ空想を行いやすいということである。

以上の二つはどちらも自身に被害を受ける内容の空想であり、自由な空間である空想内においては自

身にとって不適当な内容といえるだろう。以上の二つにおいて主効果が見られたのは情動的側面の短気性と認知的側面の敵意性である。これらは行動化する以前の段階の攻撃性であり、自身の願望と現実のギャップによる欲求不満によって起こると考えられる。それに対して行動的側面の2つは社会的な望ましさは影響するものの、その欲求不満を解消するための対処であり、抑圧は少ないと考えられ、さらにその対処方法は多岐にわたる。そのため行動的側面は空想との関連は見られず、誰もが共通して体験する欲求不満、すなわちうまくいかないという被害が、空想内においても自身が被害を受けるという内容として表れているのだと考えられる。

空想内の他傷度・他者の死の有無と攻撃性の関連

空想内における他傷度においてはどの攻撃性とも関連は見られなかった。対して、他傷度と同じく他者が被害を受ける内容である空想内における他者の死の有無においては、敵意性と主効果が見られ、空想内で他者が死なない人よりも死ぬ人の方が高いという結果であった。つまり他者に対する否定的な信念・態度が高い人は比較的に他者が死ぬ空想を行いやすいということである。

これは他者を否定するという攻撃性が、他者を死という形で排除する空想として現われたのだと考えられる。傷つける空想との関連が見られなかったのは、攻撃性の対象である他者が欲求不満の原因であり、その他者を傷つけても欲求不満の解消とはならず、他者を排除することが欲求不満の解消となるためだろう。しかし、社会的にそれを実際に行うことはできないため新たな欲求不満が生まれ、自由な空想内において他者が死ぬという内容として疑似的に解消しているのだと考えられる。つまり敵意という攻撃性が、解消できないという欲求不満とその疑似的な解消という形を通して、間接的に空想内容に表れたのだと考えられる。また、これは上記の自傷度や自身の死の有無における欲求不満よりも後の段階であるため、対処方法として攻撃性との関連が現れたのだろう。

男女差と攻撃性の関連

空想内容と性別においてはどの攻撃性とも交互作用は見られなかった。つまり空想内容と攻撃性との関連に男女差は見られないということである。性別による攻撃性への主効果が見られたのは、身体的攻撃性、言語的攻撃性、全攻撃性であり、この結果はどの分析においてもほぼ一貫している。つまり女性よりも男性の方が身体的な攻撃反応、言語的な攻撃反応が高いということである。湯川（2010）のP-Fスタディを用いた研究によると、男子は女子よりも

攻撃的反応を行う傾向が高い、という結果が出ており、そちらの結果には準じているといえる。この点を踏まえると、怒りの喚起されやすさ、他者に対する否定的な信念・態度の高さは男女差なく空想内容に表れると言えるのではないだろうか。

以上のことから空想内容と攻撃性は一部関連があることが分かった。具体的には対処する前のより原初的な攻撃性が、自身が被害を受ける空想内容という形で表れることが分かった。また、原初的な攻撃性は、欲求不満の原因である他者を排除できないという新たな欲求不満に対して、他者の死の空想という疑似的な対処方法として表れることも分かった。

この研究の結果はカウンセリング場面において活用が期待される。例えば教育場面において、子どもは自身の感情を理解できない、言語化できない可能性が考えられる。そういった子どもに対して空想の話をする事で、空想内容を投影法のように活用し、子どもの攻撃性を測ることができるのではないだろうか。例えば周囲との関係を避ける子どもに空想内容を聞いたところ、自身が死ぬような空想を行っていた場合、その子どもは怒りや否定的な信念が高く、怒りが喚起されやすいと推測できる。こういった内容は子ども本人の信念や考え方のクセといった要素が強く、本来であれば一度のカウンセリングで引き出すことは容易ではないだろう。対して空想の会話は雑談として話すことが可能であり、子どもにとっても比較的話しやすい内容であると考えられる。こういった雑談を通して攻撃性を測れる可能性が示されたのは本研究の成果であるだろう。

しかし、本研究では言語的攻撃性との関連や想像との比較など本研究では検討できない部分が多く見られたと考えられる。そのため、より空想と攻撃性の関連を検討するためにも今後の研究では空想だけではなく想像との比較や細分化された攻撃性を用いて研究することで、より正確に攻撃性を測ることができるのではないだろうか。また、空想は自由な思考であるがゆえに受ける周囲からの影響も考えられるだろう。例えば空想を見る直前に、主人公が攻撃を受ける映画等を見ていた場合、自身がその映画の主人公になり攻撃を受ける空想を行う可能性が考えられる。その他にも昨今の事件や地震、戦争などの報道といった、社会から常に受け続ける情報にも影響を受けるだろう。そのため本研究では分析を行うことができなかった空想のベースとなる物についても検討を行う必要があると考えられる。

以上のように空想と攻撃性の関連の研究有用性があると考えられると同時に、未だ検討されていない部分も多く、今後の研究で知見を蓄積していく必要があるだろう。

利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

引用文献

- 安藤 明人・曾我 祥子・山崎 勝之・島井 哲志・嶋田 洋徳・宇津木 成介・大芦 治・坂井 明子 (1999). 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性、信頼性の検討 心理学研究, 70, 384-392.
- Ludwig, A. M. (1983). The psychological functions of dissociation. *American Journal of Clinical Hypnosis*, 26, 93-99.
- (ラドウィグ, A. M. 市田 勝 (訳) (1996). 解離の精神生物的機能 精神科治療学, 11, 197-201.)
- Lynn, S.J., & Rhue, J.W. (1988). Fantasy proneness hypnosis, developmental antecedents, and psychopathology. *American Psychologist*, 43, 35-44.
- 舩田 亮太 (2008). 青年の語りから見た日常的解離の発達について 事例研究による体験・意味づけ変容モデルの検討 パーソナリティ研究, 16(3), 295-310.
- Matsumoto, T., Yamaguchi, A., Asami, T., Okada, T., Yoshikawa, K., & Hirayasu, Y. (2005). Characteristics of self-cutters among male inmates: Association with bulimia and dissociation. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, 59, 319-326.
- Putnam, F. W. (1993). Dissociative disorders in children: Behavioural profiles and problems. *Child Abuse & Neglect*, 17, 39-45.
- 田辺 肇 (2002). 解離現象 下山晴彦・丹野義彦 (編) 講座臨床心理学 3 異常心理学 I 東京大学出版会 (pp.161-182)
- 吉住 隆弘・村瀬 聡美 (2008). 大学生の解離体験と防衛機制およびコーピングとの関連について パーソナリティ研究, 16(2), 229-237.
- 横田 晋大 (2017). 攻撃性の男女差の進化的起源 —進化心理学の観点から— 心理学評論, 60(1), 15-22
- 吉住 隆弘 (2010). 一般青年の解離傾向とアグレッションの関連について P-F スタディを用いた検討 パーソナリティ研究, 19(1), 62-64.
- 湯川 隆子 (2010). P-F スタディにみる社会的表象としての攻撃反応のジェンダー・バイアス 奈良大学紀要, 38, 171-206.
- Zlotnick, C., Shea, T., Pearlstein, T., Simpson, E., Costello, E., & Begin, A. (1996). The relationship between dissociative symptoms, alexithymia, impulsivity, sexual abuse, and self-mutilation. *Comprehensive Psychiatry*, 37, 12-16.